

『地域政策研究』(高崎経済大学地域政策学会) 第22巻 第4号 2020年3月 191頁～200頁

〈総説〉

英語の冠詞習得を促す試み：何をどう教えるか

関 口 智 子

An Approach for Teaching the English Article System : What and How to Teach

Tomoko SEKIGUCHI

要 旨

本稿では、日本人英語学習者に冠詞の習得を促すために何をどのように教えるべきかについて考察する。中高で6年間、英語を勉強してきた大学生の冠詞理解が不十分なことは、特にライティングとリーディングで顕著に現れる。ライティングでは必要な箇所でも冠詞を脱落し、リーディングでは平易な文章でも正確な理解に至れないことがある。これは、学習者が、冠詞使用に関して表面的なルールは暗記していても、冠詞の基本的概念を理解していないことが一因であると思われる。本稿では、日本人英語学習者の冠詞指導において、冠詞の基本的概念を、Bickertonの「意義素」を使って体系的に導入する試みを紹介する。

キーワード：英語、冠詞、概念、意義素

Summary

This paper discusses what and how to teach English articles to Japanese learners of English. Japanese university students, who have studied English at middle and high school for six years, seem to have insufficient understanding of the articles. The effects of their ignorance can be observed more saliently in writing and reading. In writing they fail to use the articles appropriately when necessary, and in reading they often miss the intended meaning even in a simple passage. This may be because those learners have simply learned superficial rules by heart, without a deep understanding of the basic concepts of the articles. This paper explores an

approach to introducing “sememe,” as proposed by Bickerton, in classroom instruction to facilitate their acquisition of the English article system.

Key words: English, article, concept, sememe

I. はじめに

冠詞は、自分の意味するところを「正確に」伝達するため、また相手の意味するところを「正確に」理解するために重要な役割を担っている。それにもかかわらず、日本の英語教育ではあまり焦点をあてられていないのが現状である。冠詞は英語習得過程の初期から登場し、使用頻度が著しく高いにもかかわらず、習得過程後期に至ってもその理解は十分であるとは言えない。日本人学習者は、構造的に複雑な関係代名詞・関係副詞、仮定法、接続法等は、意識的な学習で比較的短期間で習得してしまうのに対し、表面的には単純に見える冠詞の習得に躓いている。大学の英語の授業においても、学生による冠詞の理解が不十分であることがうかがわれる。本稿では、続く第2章を冠詞学習の現状、第3章を大学の授業で散見される現象、第4章を冠詞に対する意識を促すための提案とし、第5章をまとめとする。

II. 冠詞学習の現状

(1) 文法テキストでの扱い

関口（2016、2018）では、高校用文部省検定済教科書の調査により、冠詞および名詞に関する取扱い方は教科書によりかなり異なること、また冠詞が決定される仕組みとなる概念よりも、むしろ個別の規則の記述に紙面が割かれていることを指摘した。ここでは、日本で出版されている大学生用文法テキストで、冠詞がどのように解説されているか検討してみよう。

A社のテキストでは、冠詞は全18課のうち第10課で「名詞・冠詞」という項目で取り上げられている。105ページ中、名詞・冠詞の解説に割かれているのは4ページ、それに続く練習問題は2ページである。A社のテキストは、冠詞使用のポイントを以下のように解説している。

初めて言及されるものや、不特定のものを指す名詞などの前には、通例不定冠詞 “a/an” を置く。また、既に前で触れた名詞に再度言及する場合や、特定の物を指す場合などには、定冠詞の “the” を前に置く。

専門的な説明を避け簡略化を意識しているのか、ここでは「特定」／「不特定」の定義には触れ

ていない。

次に、A社のテキストの文法項目の解説に続く練習問題を検討してみよう。2ページにわたり4種類のエクササイズが盛り込まれているが、文脈、状況設定が明確でなく、冠詞の本質的な用法に迫っている問題が少ない。例えば、背景知識が十分でなく、ふさわしい冠詞を入れる問題や、談話構造に頼らず文レベルのみで適切な冠詞が選べる問題がある。まず、練習問題1は空欄に適切な冠詞を必要に応じて補充するものであるが、そのいくつかを以下に紹介する。

a) I bought () new bag at () department store.

b) You are always watching () videos. Why don't you reading () books?

このタイプの補充問題は、状況設定なしに適切な冠詞を選択するのが難しいと思われる。特にこの発話の聞き手が、そのバック、デパート、ビデオ、本等の存在を既に知っているのかが重要な鍵を握っている。状況によっては、定冠詞も不定冠詞（無冠詞）も可能であろう。その際、使用する冠詞の違いでどのような意味の違いがでるのかにも注目すべきであろう。以下の問題は、語彙レベルで解答できるもので、基本的な冠詞のルールやイディオムを確認するにはよい問題と言える。

a) I entered this college in order to study () politics.

b) Tom, where have you been? Yesterday I telephoned you () time after time, but nobody answered.

上記のタイプの問題では、学科を表す名詞には冠詞を付けないという規則や、“time after time”というイディオムをチェックしている。

練習問題2は、2つの与えられた選択肢の中からどちらか適切な方を選ぶ問題である。

a) Except for rainy days, I used to go to (school / the school) by (bicycle / the bicycle).

b) When I'm free, I often enjoy playing (a / the) guitar.

c) A: What a pretty dress you wear!

B: Oh, thanks. To tell the truth, this is made of (paper / the paper).

A: No kidding!

これらの問題で、冠詞用法の基本的な知識を確認している。前置詞 by を使った手段を表す表現では、後ろにくる名詞は無冠詞、通常「楽器を弾く」という意味では、楽器を表す名詞には“the”、材料を表す名詞は無冠詞と習う。「学校に行く」は“go to school”という定型句で覚えることが多いが“go to a school / the school”とは言えないのか、また仮に冠詞を使ったらどのような意味になるかにも触れるとよいであろう。無冠詞にして名詞を抽象化することにより、“go to school”は、学校本来の機能である学習の場として学校に行く場合に用いる。しかし、もし学校が選挙投票所に指定され、学校に投票に行くのであれば、定冠詞や不定冠詞が使用されるであろう。

練習問題3は、イラストを参考に会話文を補充するものであるが、3題とも“a cup of”、“a glass of”、“a piece of”のような不可算名詞に付ける数量詞のイディオムの知識をみている。例えば、学習者は該当する箇所“a () coffee”に注目し、空欄に“cup of”と記入する。イラストで学習者にイメージを与え、基本的な冠詞イディオムを押さえる問題である。

最後に練習問題4は、与えられた3語を用いて英語で表現することを求める。その際、必要に応じて冠詞を適宜用いるのがポイントである。

(例) [books / sold / bookstore] → Books are sold at a bookstore.

与えられた“books”“sold”“bookstore”を使って矢印右にあるような英文を作る練習である。提示されている解答が最も一般的であろうが、ではなぜ“books”が無冠詞のままでもいいのか、なぜ“bookstore”に不定冠詞を付けるのかという理由が重要である。“The books are sold at the bookstore”という答案があった場合、これを誤りと見なすのか、または可能であるとするなら、学生が本当に意味したことを伝えているかをどうやって確認するのか。複数解答が可能な練習問題には、適切なフォローアップも不可欠であろう。

(2) 学生の理解

では、英語教科書や文法書等でよく目にする用語、「特定／不特定」「限定／非限定」という概念を、実際に学生はどう捕えているのだろうか。数年前ある必修英語クラスでアンケートを行い、どのような場合に“a”、“the”、無冠詞を用いるかを自由に記述させた。以下は、不定冠詞“a”の使用に関する回答の一部である。(下線は筆者による。)

- a. 一般名詞の前につける。 e.g. tree, chair, table, watch, book
- b. 不特定なものに。(文に一度も出てきていない時)
- c. 最初に出てきた単語に。初めて使うときに。
- d. 一般的な種類を表すとき。1つの個体を指すのではなく、1つの概念を指すとき。
- e. 「ある人」とか「ある少年」とか言いたいとき。

- f. 一つということを強調したい時。
g. “a /an” は可算名詞（単数）の前につき、不可算名詞の前にはつかない。
e.g. a student, a picture vs. sheep, carp

a) から tree, chair, table, watch, book のような名詞が「一般名詞」として認識されていることがわかる。文法書では、名詞は可算名詞と不可算名詞に大別され、book のような名詞は可算名詞として「普通名詞」に分類されているが、学生はおそらく「一般名詞」という用語で「普通名詞」のことを指していると思われる。

また、b) の「不特定」という概念に関する理解であるが、「文に一度も出てきていない時」、「最初に出てきた単語に」等表面的で機械的な定義で捉えられている。d) の総称用法としての理解に関しては、確かに“a”に総称用法はあるが（e.g. “a dog”）、“the” + 単数名詞 “the dog” と複数名詞 “dogs” による他の総称用法とのニュアンスの差を理解しているのだろうか。e)、f) の解説も断片的な知識に留まり、不定冠詞 “a” の根本的な概念が捉えられていない。また、g) の可算名詞 / 不可算名詞に関する理解も単純化しているように思われる。

次に、定冠詞 “the” の用法に関する回答の一部を紹介する。（下線は筆者による。）

- a. 特定な名詞に。
b. the は「その～」と訳すことができる。
c. 「例の」と言えるものにつくことが多い。
d. 前に出てきた名詞で、2回目以降の同じ名詞の前につける。
e. 何の前触れもなく文章の始めから使えない。
f. 形容詞句、関係節等で限定されているとき。

I read a book. vs. I read the book my brother bought.

定冠詞 “the” の選択には、「限定」、「特定」の概念を明確に把握することが不可欠である。学生の中には「前に出てきた」=「特定」というように理解している者もいる。また、「2回目以降に出てきた名詞につける」や「形容詞句、関係節等で限定されているとき」というように、「限定」、「特定」という概念ではなく定冠詞用法を表層的にしか理解していないことがわかる。

その他、最上級の前、“play”の後の楽器の前(e.g. play the guitar)、“the”+形容詞で「～の人々」(e.g. the poor) 等、個々の用法を記入した学生もいた。一方「不可算名詞、固有名詞に“the”をつける」、「食事、乗り物には“the”をつけない」という単純化して（時に間違っ）理解している学生もいた。これは、今まで冠詞用法が、冠詞の意味役割でなく単純化した「規則」として学んできた結果ではないだろうか。

Ⅲ. 大学の授業で散見される現象

(1) アウトプット：ライティング

4技能の中でアウトプットはスピーキングとライティングであるが、誤りがより顕在化されるのはライティングである。スピーキングは不明瞭な発音や周りの雑音などの影響を受けるが、ライティングは目に見える形で残る。特に冠詞のような通常アクセントを伴わない品詞では、学習者の冠詞用法をとらえるは難しいため、ここではライティングに見られる日本人学習者の傾向を紹介する。

日本人学習者に圧倒的に多く見られるのは、冠詞の脱落である。以下は、不定冠詞脱落の例である。

- a. I want to be (an) honest person …
- b. It was (a) holiday …
- c. I had (an) opportunity …
- d. When I was (a) junior high school student, …

名詞を形のある数えられるものとして使用する際、単数で使う場合には無冠詞ではなく冠詞が必要である。不定冠詞の脱落は、初級者に多く見られる傾向である。また、以下は、定冠詞脱落の例である。

- a. We are not (the) same person …
- b. I was (the) captain of (the) student council.
- c. (The) mandarin was a partner in my high school life.

same の前の the は落ちやすいが、“the same”という定型語句として学習させた方が効率的であろう。また、学校の生徒会は1つ、またその長も一人に限定されるので、定冠詞が必要である。最後の例文では、自分の大切にしているものがマンダリンであるという旨を述べた後に書いているので、やはり定冠詞“the”か“this”などの指示形容詞が求められる。脱落とは逆の冠詞の過剰使用に関しては、筆者の経験ではその例は少なく、必要な冠詞の脱落現象がより顕著に見られる。

(2) インプット：リーディング

次に、インプットのスキルであるリーディングにおける冠詞の影響を見てみよう。ここでは、冠詞の基本的概念が不十分なために、正確なリーディングが阻害されてしまった例を2つ紹介す

る。以下は、1年生の必修英語クラスBusiness English の指定テキストにあるリーディングパッセージである。

.... Today there are hundreds of deal-of-the-day sites – Singapore holds the record in Asia with over 60 different sites. But the best known and most successful deal-of-the-day site worldwide is Groupon, which offers cut-price deals on everything from restaurants to watches and vegetables. The company started in Chicago, Illinois, in the US, in 2008 and now has over 10,000 employees. The company’s name comes from “group” and “coupon”.....

(Business Plus 2, p.51)

本文に続き、パッセージで使用されている様々な数字が何を指すのかを問う問題がある。その中で、数字10,000の意味するものを正確に答えられた学生は18人中、わずか5人であった。不正解は、以外にも文中の“The company”がGrouponを指すと理解できなかったことに起因していた。学生は、この“The company”を何か別の会社であると捉えていた。名詞の前にある定冠詞“the”の存在を見逃していた、意に介していないように思われる。また、英語では同じ単語の繰り返しを避けるために、異なった表現を用いて既出の事物を指すということを強調する必要がある。日本語であれば、例えば「イチロー」は文章を通して「イチロー」と表現されるが、英語では、時には the former player at Seattle Mariners (元シアトルマリナーズ選手)、the Guinness world record holder (ギネス世界記録保持者) など、多彩な表現でイチローに言及する。これが、イチローと特定できるのは、“the”があるからである。

次に、選択英語クラスの World Issues から、やはり定冠詞“the”を見逃しているために正確な理解に至らなかったことを示す例を紹介する。教材として、アメリカのトランプ大統領の弾劾に関する以下の英語ニュース記事を取り上げた。

US Democrats to start public impeachment hearings

US House Democrats leading an impeachment inquiry into President Donald Trump's dealings with Ukraine plan to begin public hearings next week.

House Intelligence Committee Chairman Adam Schiff disclosed the information to reporters on Wednesday.....

(NHK World News, Nov. 7, 2019)

下線部 the information に関して、学生の多くは漠然とした情報ととらえていたようだ。どんな情報かと質問すると、意表を突かれたようで、答えに窮してしまう。この“the”の存在に気づかないのか、何か不特定の情報を公開したと理解していた。ここでは、定冠詞“the”により特定の情報、具体的には前の段落の内容「トランプ大統領のウクライナ疑惑の弾劾調査を主導している下院民主党が、来週から公聴会を行う予定である」という情報を指している。この旨を、下院情報委員長が公表したと、次の文で述べている。このレベルの英語ニュースを読む学生でも、冠詞の存在に意識が向いていないというのは残念なことである。

この2つの事例から明らかのように、冠詞、特に定冠詞の存在が意識されていないために、大学でもリーディングにおいて正確な解釈が阻害されている。これは、冠詞が名詞につくアクセサリのようなもの、あってもなくてもそれほど違いはないという冠詞軽視に一因があると思われる。冠詞は名詞を主導し、時に意味の違いをもたらすほど重要な要素であるという意識改革が必要なのではないだろうか。

IV. 冠詞に対する意識を促すための提案

日本人の英語学習が冠詞習得に躓いている現状を克服するために、本稿では冠詞の持つ基本的概念を導入することを提案する。具体的な冠詞使用のガイドラインとして、Bickerton(1981)の提唱する冠詞の意義素が1つの解決策として考えられる。

Bickerton は冠詞に2つの意義素 —「特定の指示物」(specific referent) (以下略してSR)と「聞き手の知識」(hearer knowledge) (以下略してHK) — を与え、名詞を以下の4つのタイプに分類している。

	特定の指示物の有無 (SR)	聞き手の知識 (HK)
A. 総称 “generics” e.g. <u>Dogs</u> are faithful animals.	—	+
B. 特定非限定 “referential indefinite” e.g. <u>A dog</u> is walking along the river.	+	—
C. 不特定非限定 “non-referential indefinite” e.g. He is afraid of <u>dogs</u> .	—	—
D. 限定 “definite” e.g. <u>The dog</u> that lives in the neighbor does not bark at all.	+	+

Aの総称用法では[−SR+HK]の意義素をもつため、特定の指示物はない([−SR])、つまり特定の犬に言及していないものの、話題となっている犬という種族全体が聞き手に認識されている([+HK])。Bの特定非限定用法は[+SR−HK]の意義素をもち、聞き手には認識されていないある指示物を指す。Bの例文では“a dog”のように具体的に川の辺りを歩いているある一匹の犬が存在す

る([+SR])が、聞き手にはどの犬か認識されていない([-HK])。Cの不定非限定は[-SR-HK]の意義素をもつため、特定の指示物は存在せず、聞き手にも認識されていない。例文に見られるように、犬“dogs”という動物を恐れているが、特定の犬に言及しているわけではなく([-SR])、また犬(のグループ)も限定されていない、つまり聞き手に認識されていない([-HK])。ここで“dogs”は犬という種族全体に言及しているようだが、主語ではなく述語として使われているため総称用法とは見なされない。最後のタイプDの限定用法は[+SR+HK]の意義素からも明らかのように、特定の指示物が存在し、聞き手にも認識されている。例文中の“the dog”のように、「特定の指示物」は聞き手・読み手に既知のものであると想定される場合に「限定的」と見なされ定冠詞をとる。

上記4つのタイプの中で、特に前述のリーディングの2つの事例に見られたように日本人英語学習者に障害となっているのは、最後のDである。定冠詞“the”が用いられるのは、[+SR+HK]、つまり「特定の指示物」と「聞き手・読み手の知識」双方が存在する場合だという基本概念を押さえておけば、正確な読みができるはずである。また英文を書く際には、特定の指す事物があり、読み手が認識している場合には“the”をつけるという原則で対応できる。また、[-HK]の場合は、形のある数えられる事物として名詞を使っている場合は、“a+単数名詞”か“ゼロ複数名詞”、「単数で裸にしてはいけない」という原則で対応できるであろう。このような指針で、日本人英語学習者のライティングに多く見られる冠詞脱落を克服していくことはできないだろうか。

[±特定の指示物]および[±聞き手・読み手の知識]という概念は、中学1年生には難しくても、高校や大学では十分理解できるであろう。前出の学生アンケートに記述された細かいルールの暗記より、冠詞の基本的概念の体系的理解が優先されるべきではないだろうか。英語学の専門領域にまで踏み込む必要はなく、導入としては上述の簡略化された Bickerton の定義分類で十分であろう。

V. おわりに

本稿では、中学高校で6年間英語を学んでいる日本人英語学習者は、冠詞の理解が不十分なために、大学でもライティングでは冠詞を脱落し、リーディングでは正確な理解に躓いてしまう問題を指摘した。細かなルールは暗記しているのに、実際の運用で行かされないのは大変残念なことである。冠詞は日本語にないから習得が難しい、正確に使えなくてもいいなど、冠詞に対して潜在的に距離感を持ち、初めから習得を諦めていないだろうか。冠詞は意味要素として軽視されがちであるが、冠詞の有無、定冠詞・不定冠詞の使い分けで、微妙な差異だけでなく大きな誤解につながることもある。英語冠詞の学習を通して、英語的なものの見方、とらえ方に触れることができる。冠詞学習に意義を見出すことができなかつた学習者が、少しでも冠詞に興味を持ち、苦手意識を克服してくれることを願っている。

(せきぐち ともこ・高崎経済大学地域政策学部教授)

参考文献

- 一色マサ子『冠詞』《英文法シリーズ》研究社. 1954.
- 伊東美津 英語学習者のエラーについて.九州国際大学学術成果リポジトリ. 2012. https://kiu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=358&item_no= 1 &page_id=25&block_id=33 (2018 retrieved.)
- 猪浦道夫『英語冠詞大講座』DHC. 2016.
- 江川泰一郎『冠詞・形容詞・副詞の用法』研究社. 1961.
- 織田稔『英語冠詞の世界』研究社. 2007.
- 小稲義男『冠詞・形容詞・副詞』《現代英文法講座2》研究社. 1958.
- 正保富三『英語の冠詞がわかる本』研究社. 2014.
- セイン・デイビット『ネイティブが教えるほんとうの英語の冠詞の使い方』2014. 研究社.
- 関口智子 英語冠詞指導再考.『専修大学外国語教育論集』第44号. 2016.145-166.
- 関口智子 英語冠詞指導における最新の動向.『獨協大学マテシス・ユニヴェルサリス』第20巻第1号. 2018.237-252.
- ピーターセン・マーク『日本人の英語』岩波新書. 1995.
- 町田佳世子 英語の冠詞指導を目的とした冠詞体系の構成要素と構造の検討.『札幌市立大学研究論文集』第11巻1号.2017.73-84.
- 宮下真二『英語文法批判』日本翻訳家養成センター. 1982.
- Akakura, M. Evaluating the Effectiveness of Explicit Instruction on Implicit and Explicit L2 Knowledge. *Language Teaching Research* Vol.16, No.1, 2012. 1-29.
- Bickerton, D. *Roots of Language*. Ann Arbor, MI: Karoma, 1981.
- Bulter, Y.G. Second Language Learners' Theories on the Use of English Articles: An Analysis of the Metalinguistic Knowledge Used by Japanese Students in Acquiring the English Article System, *Scholarly Commons*: http://repository.upenn.edu/gse_pubs/ 1 (2018 retrieved.)
- Geng, J. The Semantic Analysis of the Definite Article Misuse by Chinese Learners of English. *Asian Social Science*, Vol.6, No.7, 2010. 180-184.
- Iwasaki, N. *Analysis of English Articles Used by Japanese Students*. (MA thesis, Portland State University) 1995.